

## 病いと生きることの省察

Reflections on the living with disease.

山縣 弘子

YAMAGATA hiroko

Key words: 偶然性, 判断停止, 省察

### (目的)

病いは突然やってくるものでありそれは、いつもと違う体の違和感によって発覚することになる。それが不治の病いであった場合、医学の限界を意識することになるであろう。それは、ブレーキの効かない自転車、坂道をすべり落ちるように感じさせるものである。

こうした問題系は普遍的なテーマであるため、立体的に捉える必要があるのではなかろうか。

本論文では、病いと生きる人びとの現実とその苦悩を、生活の事象を通して描くことを目的とする。

### (方法)

病いを生きることは、解決不能な矛盾を抱えるため、絶望や葛藤へ対応することになる。そのため、実態へ迫ることによって理解する必要があるといえよう。

研究方法としては、再生不良性貧血という難病を抱えた、私自身の経験を記述することから病いの意味を探索すると共に、書籍を参照するなどして情報の収集に努めた。

以上をふまえ、病者の生活世界の構図を明らかにしたいと考えている。

### (結果)

病いの経験と向き合うことは、出口のないトンネルをさまようことを意味している。そのため解決策は内側で見い出すことになるといえよう。

加えて、さまざまな葛藤も生じることになる。生活のリズムが崩れるため、やりきれなさやむなしさを感じ始める。それは、悪い夢を見ているような錯覚さえ引き起こすものである。平凡な人生は送れなくなってしまうのである。

私が以前、治療のために入院した時、命の危機を感じたことがあった。治療がうまくいかなかった場合、助からないことを自覚していた。これからも生きていける人間と、そうでない人間がいることを意識したため、主治医さえ、味方の顔した敵として遠ざけようとしたのである。それは、健康な人びとを、別世界の人間として捉えていたためである。さらに、自分の病いが、20万人に1人であったという事実を知った時「なぜ、こんなことになったのか」という複雑な思いで、気が休まることはなかった。

しかし、精神的に限界を感じた時、これ以上悩むべきではないとも思い始めたのである。そして、考えるのをやめたのである。それは原因を追求しないことが、自我を守ることではないかと考えたからである。この試みをフッサールは、現象学的判断停止として次のように説明している。

「判断停止とは、言わば根本的で普遍的な方法であり、これによって私は自分を自我として、しかも、自分の純粋な意識の生をもった自我として純粋に捉えることになる。(1)」

何も見えない時は、進まない選択をすべきではなかろうか。それは、動かないということすなわち、立ち止り、保留にすることが内面性へ立ち返ることにつながるからである。それが、本来の自分を取り戻すことであるといえよう。

### (考察)

現在は、過去の重ね合わせから構成されているといえよう。それは、偶然性を包含しているため、矛盾を生み出すことになるのである。そして、ある種の緊張状態へ置かれてしまうといえる。

その結果「なぜ、私が」という問いに心を奪われてしまい、内面での対話を繰り返すことになるのである。さらに、矛盾に振り回されるため、解決の糸口も見い出せないまま進むことになるであろう。

真相を追ってはいらないことが、真理であったことに気付いた時、何が動くのかということや、どう動くのかということが見えるようになるのである。そのことは、人間らしく生きるという豊かさをもたらすために必要な、新しい道でもあるのではないか。

### 注

1) フッサール.(浜渦辰二訳)『デカルト的省察』岩波文庫, 2009, p. 48.

### 参考文献

1) メルロ＝ポンティ.(竹内芳郎・小木貞孝訳)『知覚の現象学1』みすず書房, 2006.

2) メルロ＝ポンティ.(竹内芳郎・木田元・宮本忠雄訳)『知覚の現象学2』みすず書房, 2004.